

『コレージュ版国語試験要綱』を読む：フランスの コレージュにおける国語教育の現状

飯田，伸二
鹿児島国際大学国際文化学部言語コミュニケーション学科

<https://doi.org/10.15017/9216>

出版情報：Stella. 26, pp.59-74, 2007-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

『コレッジ版国語試験要綱』を読む

——フランスのコレッジにおける国語教育の現状——

飯 田 伸 二

フランス国民教育省学校教育総局は2000年、『コレッジ版国語試験要綱』（以下『要綱』と略記）と題する小冊子を作成し、各コレッジに配布した。その目的は、新カリキュラム施行を機に改革されたブルヴェ取得試験における国語試験の主旨・構成を現場の教員に説明し、同時に新しい問題例を具体的に提示することにあった。いわば行政サイドが教員向けに作成した官製模擬問題集である¹⁾。

ブルヴェの国語試験は、問題文への理解力を測る問題（日本の高校入試で課される国語問題に最も近い）、綴り字にかんする知識を問う問題、作文能力をためす問題の3種からなる。本稿では、『要綱』がどのようなテキストを問題文として選択しているかを紹介したのち、日本の高校入試における国語問題との強い類縁性という理由から、理解力を測る問題に分析の焦点を絞り²⁾、どのような設問が課せられているかを具体的に検討する。この作業を通じて、行政サイドが、コレッジを修了する一般生徒にどのような国語の知識・能力を求めているのか、さらにそもそも何を国語知識・能力と規定しているのかを考察したい。

だが管見のかぎり日本ではブルヴェという制度についての研究はほぼ皆無といってよい。そこで『要綱』分析の準備として、まずブルヴェとは何か、そして初等・中等教育における現行の国語教育のなかでコレッジのカリキュラム改訂はどのような役割を担ってきたかを簡潔に紹介しておこう。

ブルヴェとは何か

通称ブルヴェと呼ばれている証書の正式名称は *Diplôme national des brevets* であり、「初期中等教育修了証書」と訳されている。4年間にわたるコレー

ジュの修学期間で学んだ学習内容を十分に身につけたことを証明する証書である。ただしブルヴェの取得は、コレージュ卒業の可否を含め、生徒の進路に直接影響を与えるわけではない。これらは、卒業試験や進学試験によってではなく、生徒本人、コレージュの担任、家庭の協議によって決定されることになっているからである。

ブルヴェは生徒の進路に関与しないものの、コレージュ第3学級（コレージュ最終学年である4年目に相当）の教員の強い勧めもあって、第3学級に在学するほぼ全生徒が受験する。それゆえ、リセ進学に際し入学試験のないフランスでは、ブルヴェはコレージュの学習における重要な指標になっている。この点からも、ブルヴェの国語試験は、初期中等教育の段階で生徒が修得すべき国語能力を測るうえで貴重な手がかりなのである。

ブルヴェの試験はコレージュ第3学級におけるコースに合わせてコレージュ系、技術系、職業系の3つの系に別れて実施される。ここでは、日本における高校普通科への進学コースに相当し、コレージュ生徒の圧倒的多数が受験するコレージュ系にそって若干の説明をしておこう³⁾。試験の可否はフランス語、数学、地理歴史・市民教育の3科目にわたる筆記試験、および平常点の総合評価で決定される。平常点の対象となるのは、ブルヴェの3科目以外に、第3学級時における第1外国語、生物・地学、物理・化学、体育、芸術（美術および音楽）、技術、第2外国語もしくは職業教育の成績、および就学態度（欠席、遅刻のチェック）である。配点は筆記試験が120点（各科目40点）、平常点が200点で、合格には総点の50%以上、つまり160点以上が必要である（ただし筆記試験で0点の科目が生じた場合はただちに失格となる⁴⁾。出題方法だが、フランス本土については26ある大学区を東西南北の4グループに統合し、グループ内では同一問題が出題される。ただし、可否の判定や採点は県ごとに行われる。

ここ10年にわたる初等・中等教育での国語教育再編において、コレージュのカリキュラム改訂が果たした役割についても触れておこう。フランスでは1996年から段階的にコレージュの教育内容が刷新されてきた。まず、1996年に第1学年に当たる第6学級のカリキュラム改訂が行われ、その後1年ごとに1学年上のカリキュラムが改訂された。その後、コレージュの改革を引き継ぐかたちで2000年にリセ第1学年に当たる第2学級と第1学級のカリキュラムが

発表され、同年から逐次施行された。これに合わせてバカロレアのフランス語前倒し試験 (épreuve anticipée de français) の出題形式も 2002 年から大きく様変わりした⁵⁾。初等教育のカリキュラムも近年改訂されたが、こと国語にかんしては、改訂作業の眼目は、コレージュの教育内容とのより緊密な一貫性を実現することにあった。つまりコレージュのカリキュラム改訂は、初等・中等教育における教授内容の見直し作業において、パイオニアにして支柱の役割を果たしてきたのである⁶⁾。それゆえ、第 6 学級では新カリキュラム施行後すでに 10 年以上が経過し、その間に政権担当政党が 2 度変わり、しかも施行当初から様々な批判・論争にさらされたにもかかわらず⁷⁾、コレージュの現行カリキュラムは異例とも言える長命を保っているのである。

『要綱』収録のテキスト

フランスではカリキュラム改訂に伴い、各課程の修了試験の内容・形式が行政の関与により大きく変わることが少なくない。今回のカリキュラム改訂もその例に漏れない。『要綱』の冒頭でも、具体的な問題例の提示・分析に先だち、設問の形式、設問の意図、各設問に割り当てられた解答時間、配点等が提示してある。ここでは『要綱』を参照しながら、国語問題がどのように実施されているのかを確認しておこう。

ブルヴェの国語は 3 つのパートで構成される。第 1 部「設問」は、問題文についての質問からなる。問題数は定められていないが、『要綱』に収められた例題ではほぼ 20 問弱である。配点は 15 点である。

第 2 部は「綴り字の評価」で、書き換えとディクテという 2 種類の課題からなる。配点は 10 点 (書き換え 4～5 点、ディクテ 6～5 点) である。書き換えとは、第 1 部の問題文の一節を指示 (例えば主語を «je» から «nous» に換える) に従いリライトする問題である。ディクテは従来と比べて著しく簡素化され、数行程度である。『要綱』からは、ディクテで使用されるテキストと問題文とのあいだには関連性は確認できない。解答時間は第 1 部と第 2 部を合わせて 1 時間 30 分で、最後の 15 分がディクテに当てられている⁸⁾。

第 3 部は「作文」である。問題文と形式上あるいは内容上の関連のある文章の作文が求められる。作文に当たっては長さやスタイルについて、細かい指示が付される。周知のように、2002 年から新形式で実施されているバカロレアの

フランス語前倒し試験では、問題文を基に新たに文章を想像する「創作文 (écrits d'invention)」が導入されている。ブルヴェの課題はバカロレアの新問題と形式がきわめて類似している。これは中学・高校の有機的な一貫性をいっそう担保するためであろう。第3部の解答は、第1部と第2部の解答後、15分間の休憩を挟んで行われる。解答時間は1時間30分。国語辞典の使用が認められている⁹⁾。

現行の国語ブルヴェの背景、実施の条件を明らかにしたところで、『要綱』で問題文として使用されるテキストの検討に移ろう。序論には以下のような収録作品が列挙されている¹⁰⁾ ——

	作 者	作 品	世紀
1	リュック・ブラモンドン	モノボリス	20
2	ディディエ・デナンクス	ミステリー・クイズ	20
3	コリン・ヒギンズ, ジャンクロード・キャリエール	ハロルドとモード	20
4	アルチュール・ランボー	びっくり仰天した子供たち	19
5	匿名 (ル・モンド)	社会的断絶	20
6	アルベール・カミュ	最初の人間	20
7	ヴァンサン・イブサ	磁気製スポンジ	20
8	シャトーブリアン	墓の彼方の回想	19
9	ラ・ブリュイエール	人さまざま	17
10	匿名 (テレラマ)	視聴率調査回答者の生活	20
11	カルヴォ	野獣は死んだ	20

このリストでまず注目すべきは、その多様性である。第3共和制下、フランス語が古典語・古典語文学の補助的科目という地位から脱却し、科目としての自立性を確保して以来、国語は、文学を読み、文学について語るための科目であった。その伝統を忠実に守って『要綱』は、17世紀から20世紀までのフランス文学史には欠かせない文学者の名前を並べている。同時に『要綱』は、問題文を文学作品だけに限定せず、流行歌や絵本、新聞・雑誌の記事など多様なテキストを収録している。くわえて、「社会的断絶」および『野獣は死んだ』

では文章ばかりか挿絵も設問の対象となっており、イメージの解釈が高得点を得るための必須条件である。使用テキストの多様性を確認したところで、良問の多い『人さまざま』を例にとりながら、具体的にブルヴェ第1部の「設問」を検討したい。まず問題文全体を引用しよう（受験者の便を図って問題文に出題者が付した4つの語句註は除く）――

テキスト 9

花の愛好家は郊外に花園を所有している。彼は日の出とともに花園へ駆けつける。そして太陽が沈むと戻ってくる。あなたには彼が見える。花園では、自分のチューリップに囲まれて、「孤独」という株の前で、植えられて、根を生やしたようにじっとしている彼の姿が。目は大きく見開かれ、揉み手をしている。彼は身を屈め、顔を近づけて花を見る。これまで「孤独な女」がこれほど美しくみえたことはなかった。彼の心に歓びの花が咲く。その花を離れ、「オリエントの娘」の所に行く。そこから「寡婦」のもとへ。そして「黄金の布」のもとに。それから「アガト」の所へ。そして「孤独な女」のところに戻ってきて、そこから動かない、疲れて、座り込んで、夕食も忘れる。何しろこの花は微妙な色で、緑の色が違い、油を塗られたように輝き、花びらには切り込みが入っているのだから。花振り、あるいは萼は見事だ。彼はうっとり眺める。ほれぼれと眺める。だがこの花のなかで、神、自然は彼がまったく感嘆しないところに存するのだ。彼の感嘆はチューリップの球根よりも遠くまで行くことがない。彼は千エキュ積まれても、この球根を手放すことはないだろう、だが、チューリップの流行が廃れ、カーネーションがもてはやされると、ただ同然で手放すだろう。この分別をわきまえた男、魂、信仰、そして宗教を備えた男が家に戻ってくる。疲れ、腹をすかせて、だが自分の一日にとてもご満悦で。彼はたくさんのチューリップを見てきたのだから。

あの別の男に、秋の豊かな収穫について、たっぷりの取り入れについて、ブドウの見事な摘み取りについて語ってみるといい。彼は果物に凝っているのだから、話はまったく通じないだろう、話が耳に入らないのだ。彼にイチジクやメロンを語ってみるがいい。今年は梨が枝もたわわになっている、桃もたっぷりなつたと言ってみるがいい。彼にとっては聞いたこともない方言だ。彼は唯一スモモの樹に腐心していて、返事をしない。スモモの樹一般について話しても無駄。特別な品種にしか愛着がないのだから。ほかの品種の名をあげても、冷笑やあざけりを買うのが関の山。彼はあなたを彼の愛するスモモの木に連れて行く。見事な手つきでその極上のスモモを摘み取り、割り、半分をあなたに差し出し、半分を口に入れる。「なんて果肉でしょう。味が分かりますか？ まさしく神業でしょう？ 他ではお目にかかれませんか！」

ラ・ブリュイエル『人さまざま』「流行について」¹¹⁾

この問題文にかんしてまず指摘すべきは、1時間以上という、日本の高校入試

からすれば長い解答時間にもかかわらず、問題文が短い点である。若干の偏差はあるものの、全体的に見ればラ・ブリュイエールのテキストは問題文としては標準的な長さと言えよう¹²⁾。解答時間はブルヴェ第1部の半分程度でありながら、この問題文と同等あるいはそれ以上の長さの文章を複数読ませる日本の高校入試問題とは対照的である¹³⁾。これは設問への解答方法によるところが大きい。高校入試では定番ともいえるタイプの問題、つまり正答を記号や番号で答える選択問題、空欄を適当な語句で埋める穴埋め問題といった問題は一題もない。ブルヴェではすべてが記述式問題である。問題がいかに容易でも、解答にあたっては自らの文章で答えねばならないのである。

『要綱』の設問

ではこのテキストにはどのような設問が付されているのだろうか。日本ではブルヴェの実態がほとんど知られていない事情を考慮して、全設問を訳出することにする――

〈2つの肖像〉

第1問 第1段落ではいくつかの語がイタリック〔訳文ではカギ括弧〕になっています。これらは何を指しますか。(1点)

第2問 a. 第2段落では、「果物」「スモモの樹」「ある特別は品種」「その樹」「その極上のスモモ」という用語には、どのような関係を打ち立てることができますか。(1点)

b. なぜこの関係は第2の肖像における重要な要素なのですか。(1点)

第3問 あなたが気づいたことをもとに、それぞれの段落にタイトルをつけ、その根拠を説明しなさい。(1点)

第4問 問題文で主に使われている時制は何ですか。また、その理由を説明しなさい。(1点)

第5問 a. 第1段落と第2段落を比較して、動詞の法、人称代名詞について、どのような変化が見て取れますか。(1点)

b. この変化をどう解釈しますか。(1点)

〈ある性格——第1段落の読解〉

第6問 「あなたには彼が見える。[…]「孤独」という株の前で、植えられて、根を生やしたようにじっとしている彼の姿が」。人物を語るためにどのような語彙が使われていますか。作者が同じ手法を使っている表現を問題文中から抜き出しなさい。(1点)

第7問 「そして「孤独な女」のところに戻ってきて、そこから動かない、疲れて座り込んで、夕食も忘れる」。これらの節の種類は何ですか。この構文の繰り返しが生み出す効果は何ですか。繰り返しは登場人物の性格のどのような特徴を強調していますか。(1.5点)

第8問 「カーネーションがもてはやされると」の「と」はどんな言葉で置き換えることができますか。この節の意味を、この節が補足説明している節と関連づけて説明しなさい。(1.5点)

第9問 「花の愛好家」という名詞は、同じ段落のなかで、名詞句によって言い換えられています。

- a. その名詞句とは何ですか。(1点)
- b. この名詞の言い換えをどう解釈しますか。(1点)

〈モラリスト的テキスト〉

第10問 このテキストでラ・ブリュイエールは人間の言動のどのような側面を批判しているのですか。(2点)¹⁴⁾

これだけの質と量の設問に1時間強の解答時間で対応するには、かなり高度な文章読解・作成能力が要求される。しかも設問がコレージュ第3学級のほぼ全員が受験するブルヴェの試験問題として、行政サイド作成の想定問題集に収められている以上、これらの設問は標準的な難易度であると考えられる。この事実からも、フランスでは論理的文章を書く訓練が小学校から繰り返し行われていることが想定できる。

この大前提を確認したうえで、ブルヴェ第1部の全体的な出題意図を『要綱』序論を参照しながら把握しておこう。出題の狙いは、従来のブルヴェでは「文法」「語彙」「理解」に分けられていた設問をもとに、「問題文の意味を構築する」ことにある。つまり、受験生自らが問題文を「分析し、解釈し、理解するように導くこと」である。テキストのディテールを把握したうえでテキスト全体の意味を構築する読解法は、日々の授業への適応が推奨される教授法「分析的読解」と、まさに手法や狙いが合致している¹⁵⁾。

設問の提示方法も、受験者がテキストの意味を自身で導くための手だてと位置づけられている。それゆえ『要綱』は、設問をテーマ別に複数のグループに分け、それぞれのグループに「読みの基本方針」¹⁶⁾と呼ばれる表題を付すように指示している。その狙いは、直接設問の答えを提供しないかたちで受験者の読みを導くことにある。

設問の検討

設問の形式的な特徴を明らかにしたところで、各例題に付されている「採点の手引き」を参考にしながら、個々の設問を細かく検討してみたい。

第1問は「語彙」にかんする問題と「理解」にかんする問題を合わせたものと言える。カギ括弧に囲まれた女性や奢侈品の名前がチューリップの品種を指すと把握しておくことは、第1段落のみならず、テキスト全体の理解に不可欠である。導入問題としては適当な設問と言えよう。

第2問は、「2つの肖像」という表題にふさわしく、第2段落の中心テーマとなる果物にかんする問題である。日本の高校入試では、漢字にかんする問題を除けば、問題文の進行に沿って設問を並べるのが一般的だが、ブルヴェでは「読みの基本方針」が設定するテーマと難易度に従って設問を配置する傾向にある。設問aは、「果物」→「スモモの樹」→「ある特別な品種」→「その樹」→「その極上のスモモ」と、段階的に話題を絞り込む文体上の操作に受験生の注意を引く問題である。設問bでは、その絞り込みの方向性が問われている。つまり徐々にテーマが細くなるあまり、スモモに関心を持つ男の滑稽さが浮き彫りになるのである¹⁷⁾。このようにブルヴェでは、テキストの意味を問うに先立ち、準備作業としてその文体的特徴にかんする問題を課すことが多い。第2問はその典型である。レトリックの専門用語は可能な限り避けられているとはいえ、広い意味でのレトリック問題、つまり、意味がどのような文体的操作を経て生み出されるかを考えさせる問題はブルヴェで最も重視されている設問のひとつなのである。

第3問は、前2問のまとめである。比較的容易な問題と言えよう。「採点の手引き」でも、各段落で愛好家の情熱が何に向けられているかが採点者に理解できる解答であれば、正解とするよう指示されている¹⁸⁾。

第4問は文法問題と、発話行為にかんする知識を問う問題である。このような設問が可能なのは、現行カリキュラムに戦後の言語学の成果が多く盛り込まれているからにはかならない¹⁹⁾。正答としてまず求められるのは、「問題文で主に使われている時制は直説法現在である」ことを指摘することだ。さらに、この問題はその理由の説明も求めている。「採点の手引き」は、問題文が発話行為の状況に根ざしたテキストであること、習慣を語っているテキストであることの2点を挙げている。これはコレージュでの教育を考える上で示唆的である。

なぜならこの問題は、発話行為の状況に根ざしたテキストと、根ざさないテキストの区別、バンヴェニストの用語に従えば「ディスクール」と「レシ」の区別に受験者が通じていると想定していなければ、課すことのできない問題だからである。

第5問も、まず受験者にテキストの形態的な特徴に着目させ、その効果を考えさせるセット問題であり、第2問、第4問のパターンを踏襲していると言える。第1段落では直説法が主調だが、第2段落では命令法が主調である。同時に、人称代名詞「あなた」が多用されている。この法・人称代名詞の変化は、文体を多様化させると同時に、「読者を参加させ」、「描かれている光景を読者に生き生きと体験させる」効果を生み出す²⁰⁾。

表題「ある性格——第1段落の読解」が示すように、第6問から第9問まではすべて第1段落にかんする設問である。第1問、第5問も第1段落についての問いであった。これほど短い文章にかくも多数の設問が付されることから、コレージュの「分析的読解」が受験生の注意をいかにテキストの細部に向けさせようとしているかが見てとれる。

第6問は語彙についての設問である。正答は「〈植えられ〉と〈根を生やした〉といった植物にかんする語彙」となる²¹⁾。また、同じ手法は「彼の心に歓びの花が咲く」という一節に見られる。比較的容易な問題だが、受験生は、植物の語彙が、愛好家の肖像と、その情熱の対象を結ぶことでテキスト的統一を作りあげていることに気づくであろう。

第7問は、またもやテキストの形式上の特徴に注意を向け、その意味を問うもの。問題となっている節は、名詞グループ「孤独な女」を修飾する関係代名詞節である。比較的容易な問題だが、基本的な文法用語を知らなければ解答できない。この節では〈où + 主語 + 動詞〉と同じ構文が5回繰り返されている。設問の後半「繰り返しは性格のどのような特徴を強調していますか」は、受験者自らがテキストを解釈するように誘っている。多様な正答が可能であろうが、『要綱』の解説には、「この同一構文の繰り返しは、愛好家の日中の活動のすべてが、彼の偏愛するチューリップを中心に回っていることを強調している」²²⁾という解釈が見られる。

第8問は「チューリップの流行が廃れ、カーネーションがもてはやされると (quand les tulipes seront négligées et que les œillets auront prévalu)」

における接続詞 que の機能を問う文法問題である。これは、接続詞 que は先行する接続詞 (句) の代理となりうる、という知識があれば、つまり「…の時 (quand)」は「と (que)」で置き換え可能であることを知っていれば容易に解答できる。また、この副詞節は愛好家の情熱が容易に変化するを示している。それゆえ、この節の説明を求める問いへの正答は、「カーネーションがもてはやされるようになれば、彼のチューリップへの情熱はすぐにカーネーションに取って代わられるだろう」となる²³⁾。

第9問も、まず文体上のテクニックに注意を向けさせ (a)、それについて解釈させる (b) 問題である。まず a は「花の愛好家」を言い換えている名詞句を捜させる設問だが、同じ段落の後続箇所では「この分別をわきまえた男」しかない。b の解釈では、「分別をわきまえた男」という表現が反語 (antiphrase) であることを指摘すれば十分であろう。ただし『要綱』は、反語というレトリック用語を用いずとも、「分別をわきまえた男」という表現と、情熱に振り回される彼の実際の行動とが矛盾する事実を指摘していれば正答とするよう強調している²⁴⁾。

第10問は、テキストの批判の対象を問うもの。最終設問にふさわしく、問題文全体のテーマを尋ねている。『要綱』による正答は「ラ・ブリュイエールはこのテキストで浅はか、滑稽で移ろい易い情熱によって、自分を失ったふたりの人間の言動を非難している」²⁵⁾。

批判的距離

以上、配点にして40点満点中15点に相当するブルヴェ第1部の全問を検討してきた。これまでの検討結果、さらに『要綱』に収められている他の問題を参考にしながら、ブルヴェの基調をなすものを規定しよう。

まず、文法・表現・語彙にかんする問題は、独立して出題されることは稀である²⁶⁾。多くの場合、コレッジで実践されている「分析的読解」の手法にしたがい、テキストの細部にかかわる問題は、該当箇所を含む文や段落全体など、より大きな文脈にすえ理解・解釈する問題と組み合わせて出題されるのが一般的である。

この分析的態度は問題文が描きだす世界にたいして、設問がとる距離にもよく表れている。日本の高校入試では、受験者に登場人物のひとりと一体化する

ことを求め、登場人物の立場に立って状況を解釈するよう促す傾向にある。つまり、石原千秋の表現を借りれば、「登場人物の〈内面〉、つまり〈気持ち〉ばかり問う設問が多い」²⁷⁾のである。その結果、登場人物の微妙な心の動きを問うあまり多様な答え方が可能な問題が出題される一方で、時として問題文の分析はおろか、問題文を読まずとも社会常識・道徳に照らし合わせれば解答可能な問題が少なからず出題される²⁸⁾。一方、『人さまざま』に付された設問の検討からは、ブルヴェが受験生に求めるのは、問題文が喚起する世界に入り込むことよりは、むしろそれと批判的距離を取ることであることが明らかになった。さらに、その世界がどのように構造化されているかを検討することが求められていることも確認できた。

受験生に求める知識・能力が日本の国語とは違うことは、設問だけではなく、問題文の選択からも見て取れる。石原の研究によれば、日本の高校入試では、受験生とほぼ等身大の少年少女が主人公である小説が頻出している²⁹⁾。だが『要綱』にそのような傾向を見いだすことはできない。たしかに子供が主人公であるテキストが問題文として採用されてはいる。『ハロルドとモード』『びっくり仰天している子供たち』『墓の彼方の回想』がそうである。だが『ハロルドとモード』では、子供はもう一人の主人公である老女モードの若々しさを引き立てる存在でしかない。またランボーの詩が描く子供たち、シャトーブリアンンの自伝の主人公には、歴史性と階級性があまりに深く刻印されており、受験生と等身大の存在とは言えず、現代のフランスに生活するコレージュの生徒がこれらの登場人物と一体化することはまず不可能である。

このように『要綱』では、一般的な道徳や、子供らしい振る舞いに照らせば解答可能な問題は周到に避けられている。むしろ、それは『要綱』があらゆるドクサから自由であることを意味するわけではない。じじつ、この官製模擬問題集には、ジャンルという視点からすればきわめて多様なテキストが収録されているものの、テーマという面ではいくつかの明確な方向性が見て取れる。まず、テレビを批判する文章が2点収められている事実は注目に値しよう。ディディエ・デナクスのテキストはテレビのクイズ番組を舞台裏から批判したものである。一方、本来はテレビ番組の紹介誌である『テレラマ』の記事は、視聴率の測定方法がいかにも恣意的であるかを説き、視聴率を過度に重視する風潮を暗に批判している。その一方、活字メディアは信頼に値するメディアとし

て問題文に選択はされても、批判の対象となることは一度たりともないのである。

批判的精神の涵養はカリキュラムでも、コレッジにおける学習目標として言及されている³⁰⁾。じじつ『要綱』には、テレビを標的にした文章のほかにも批判言説が数多く収録されている。「モノポリス」は、この歌詞の書かれた1978年から見た2000年の社会、つまり現代社会を批判している。その社会では、生活は簡便になった一方で、住民は常に監視の目に曝され、互いに連帯を失い孤独に陥っている。また、すでに確認したように、『人さまざま』は古典ながら、現代社会の特徴ともいえる「流行」に批判の矢を向けている。

また『要綱』では、国語という科目でありながら、現代史、特に第2次世界大戦への言及がなされているばかりか、大戦についてのかなり踏み込んだ知識がなければ正答を得られない設問が少なくない。この事実は『要綱』全体のなかで文学史にかんする設問が一問も見あたらないだけにとりわけ注目に値する。たとえば、「モノポリス」の住民は「背中に番号を付け、肌に星がある」。設問の一つは、この描写を歴史的事実と照らし合わせて説明するよう求めている³¹⁾。読解問題というよりは、ナチズム、とりわけユダヤ人の強制収容という歴史的事実にかんする知識を問う問題である。また、動物を登場人物に仕立てて第2次世界大戦を寓話的に描く『野獣は死んだ』に付された設問には、挿絵に登場しているオオカミ、野牛、ブルドッグ、ウサギ、ライオンの子、クマなどがいずれの国民層に対応するかが問われている。正答を得るには、単に問題文を精確に読み解くだけでは不十分であり、各国の国旗、シンボル、国民性、大戦で果たした役割についての知識を動員することが不可欠である。国語という科目の独自性を大きく逸脱したこれらの設問こそ、フランスの教育現場において人種差別やファシズムへの警戒心がどれほど作用しているかを示す証左である³²⁾。

結 論

ブルヴェ試験の国語第1部を詳細に検討した結果、行政サイドの目論見がおぼろげながら浮き彫りになった。それは概ね以下のようにまとめることができるだろう。

問題文は従来のように文学作品からだけでなく、多様な範疇から選択され

ている。この傾向には、ここ四半世紀で急激に大衆化した中等教育の全般的現状に国語教育の実質を適応させようとする行政サイドの意図が見てとれる。すなわち、国語イコール文学教育という、特に教員のあいだで根強く残る固定観念から脱することである³³⁾。ただし種類は多様ながら、その内容には明確な傾向が見られる。現代社会を批判的に捉えるテキストが基調をなしているのだ。つまりコレッジ卒業レベルに求められる国語力とは、文学史の知識や文学作品を鑑賞する力ではなく、むしろ様々な種類・ジャンルのテキストを読み解く力、そして現代社会を批判的に眺める視点の獲得、と要約することが許されよう。

とはいえ、フランスにおける教育改革の流れを概観するかぎり、行政サイドの目論見が即座に現場の教員に理解され、受け入れられてきたわけではない。これまでフランスの国語教育は、行政サイドの方針を教員が批判しながら選択的に現場に取り入れることで推移・発展してきた経緯がある。それゆえ当面の課題は、実際にブルヴェで出題された問題を検討し、ブルヴェの問題が行政サイドによって提示された模擬問題のいかなる点を踏襲し、いかなる点を忌避しているかを検討することとなる。

註

- 1) *Diplôme national du brevet : Série collège : français : annale zéro*, [Paris] : CNDP-DESCO, 2000, 42 pp. なお本稿の執筆にあたっては、国立教育資料センター(CNDP)のサイト(www.cndp.fr/seconaire/francais/annazero/pdf/ann0-fr.pdf)よりダウンロードしたものを使用した。
- 2) 日本には中学校卒業試験はないので、日本の国語教育との比較を行う場合は主に公立高校の入試問題を参照軸とする。
- 3) «Le diplôme national du brevet», in *Repères et références statistiques sur les enseignements, la formation et la recherche*, Paris : Ministère de l'Éducation nationale et le ministère de l'enseignement supérieur et de la recherche, 2007, pp. 226-227 [<http://media.education.gouv.fr/file/61/2/6612.pdf>]. 2007年は総受験者776,937人の85%以上におよぶ662,214名がコレッジ系を選択している。ちなみに合格率は全体では81.7%, コレッジ系に限れば89%に達する。
- 4) «Arrêté du 28 juillet 2005 : modalité d'attribution du diplôme national du brevet», *Bulletin officiel du Ministère de l'Éducation nationale*, n° 31, 1^{er}

- septembre 2005 [<http://www.education.gouv.fr/bo/2005/31/MENE0501646A.htm>] ; «Arrêté du 1^{er} juin 2006 : modalité d'attribution du diplôme national du brevet», *ibid.*, n° 26, 29 juin 2006 [<http://www.education.gouv.fr/bo/2006/26/MENE0601428A.htm>].
- 5) この点については、拙稿「岐路に立つフランス語教育——新プログラムが問いかけるもの」、『日仏教育学会年報』第8号、2002年3月、64-75頁を参照されたい。
 - 6) この点については、拙稿「母国語の再構築——コレッジ第6学年現行フランス語カリキュラムをめぐる」、『日仏教育学会』、2006年3月、57-66頁を参照されたい。
 - 7) フランスにおける国語教育に対する批判や問いかげは枚挙にいとまがないが、文学研究者・教員が表明したものとしては、Michel JARRETY (dir.), *Propositions pour les enseignements*, Paris : PUF, 2000, 190 pp. を挙げておこう。批判の声は理系の研究者からも上がっており、事態の深刻さを伺わせる。たとえばフィールズ賞数学者ローラン・ラフォルクは数年来、現状の国語教育を批判する発言を繰り返している。ラフォルクの発言は彼のホームページで閲覧することができる (<http://www.ihes.fr/~lafforgue/education.html>)。
 - 8) 書き換え問題は難易度が比較的に低いことから鑑みるに、ブルヴェ第1部に受験者が割くことのできる解答時間は1時間5～10分程度と考えられる。
 - 9) *Diplôme national du brevet*, op. cit., pp. 4-5. なお、国語の解答時間が3時間なのに対し、他の2科目(数学および地理歴史・市民教育)の解答時間は2時間である。Cf. «Note de service : modalités d'attribution du diplôme national du brevet», *Le Bulletin officiel du Ministère de l'éducation nationale*, n° 31, 9 septembre 1999 [<http://www.education.gouv.fr/bo/1999/31/ensel.htm>].
 - 10) *Diplôme national du brevet*, op. cit., p. 3. ただし著作権の問題から、人気歌手ミシェル・ベルジェ作「モノボリス」の歌詞は収録されず、設問だけが掲載されている。『最初の人間』と『磁気製スポンジ』に至っては、テキストはおろか、設問さえも掲載されていない。ただし「モノボリス」の問題文、『最初の人間』の問題文、設問、解答の手引きはナンシー・メスの大学区視学局のホームページ (http://www.ac-nancy-metz.fr/enseign/lettres/Inspection/BO_IPR_accueil.htm) で閲覧可能である。
 - 11) *Ibid.*, p. 30. なお訳出に際しては、ラ・ブリュイエール『性格論』(中村通介訳)中巻、青木書店、1943年(第4版)、177-178頁を参照した。
 - 12) たしかに、現代の人気作家ディディエ・デナクスのテキストや『テレラマ』の記事はここに引用した問題文よりもかなり長い。だが『人さまさま』の問題文はシャトブリアンの散文と同程度であり、リュック・ブラモンドンの歌詞やランボアの詩篇と比べればあきらかに長い。挿絵付きの「社会的断絶」『野獣は死んだ』はラ・ブリュイエールの問題文とほぼ同じ長さである。
 - 13) 昨年度実施された各都道府県の公立高校入試の国語では、解答時間が45分～50分

であるのに対し、問題文としては少なくとも小説、論説文、古典（古文もしくは漢文）の3種類を課すのが一般的である。『2008年受験用全国高校入試問題正解——国語、数学、英語』、旺文社、2007年を参照。

- 14) *Diplôme national du brevet*, op. cit., pp. 31–32.
- 15) *Ibid.*, p. 4.
- 16) *Idem.*
- 17) *Ibid.*, p. 32.
- 18) *Idem.*
- 19) *Inspection générale de l'éducation nationale. L'Enseignement du français au collège*, Paris : Ministère de la jeunesse, de l'éducation nationale et de la recherche, 2002, pp. 2–3.
- 20) *Diplôme national du brevet*, op. cit., p. 32.
- 21) *Idem.*
- 22) *Ibid.*, pp. 32–33.
- 23) *Ibid.*, p. 33.
- 24) *Idem.*
- 25) *Idem.*
- 26) この点も、漢字の綴りや読み、文法問題を文章読解の作業と分離して出題することが少なくない日本の公立高校入試問題とは対照的である。『2008年受験用全国高校入試問題正解——国語、数学、英語』、旺文社、2007年を参照。
- 27) 石原千秋『小説のための高校入試問題』、日本放送出版協会、NHK ブックス、2002年、32頁。
- 28) 同上、66頁。
- 29) 同上、174頁。
- 30) たとえば第3学級のカリキュラムには以下のような文言がある——「様々な視聴覚作品（テレビ番組、コマーシャル、ドキュメンタリー番組、フィクションなど）の分析を通じ、批判精神を涵養する」(Ministère de l'éducation nationale, de l'enseignement supérieur et de la recherche, direction de l'enseignement scolaire, *Enseigner au collège : français, programme et accompagnement*, Paris : CNDP, 2005, p. 163)。
- 31) *Diplôme national du brevet*, op. cit., p. 7.
- 32) *Ibid.*, p. 39.
- 33) フランス中等教育における「国語」という教科の学習目標・内容が他科目に比べ曖昧であることは、教育現場と教員採用試験とで異なった科目名が使用されているという、いささか不条理な実態からもうかがえる。中等教育で国語（フランス語）を担当する教員は、採用試験で「国語」という科目を受験するわけではないのである。周知のようにカベス、アグレガシオンといった採用試験での科目名は「古典文芸 lettres classiques」もしくは「近代文芸 lettres modernes」あるいは「文法」で

あり、「国語 français」という名称は使用されていない。もちろん，こうした事態は他の科目では見られない。

- *) 本稿は平成 19 年度科学研究費補助金（課題番号 19530849 「フランスにおける国語現行カリキュラムの理念と実践——コレージュを中心に——」）による研究成果の一部である。